中野香織

⑳男の裸体の効果

カンヌ、お疲れ様でした。ヴィンセント・ギャロのなまものが出てくる映画については、日本の新聞も大きく報じてましたよ。たとえ報道の内容が酷評であっても、これだけ話題になれば、「勝った」ようなもんでしょうか、ギャロにとっては。

そのシーンがグロいというのも（未見とはいえ）想像上で納得できるし、「ヤング・アダム」での「脱いだユアン・マクレガー」が寒々、っていうのもわかる気がします。

この「男がパンツを脱ぐと色気がなくなるのはなぜか」問題を考えていたところ、なんとつい先日、イギリスでこの問題をみごとに説明してくれる（というか説明不要にしてくれる）事件がありました。

コメディアンのガイ・ベナブルズという男が、ブライトンの水族館の水槽に裸で飛び込んだんです（売名目的らしい）。で、運悪くその水槽で泳いでいて、そいつの裸を見ちゃったホシザメくん（12）が、ショックで死んじゃった、っていう。検死の結果しだいでは、このコメディアン、損害賠償金を支払うはめになるらしい。

男の裸はサメをもショック死させる。

さて、下半身ネタに横滑りしたついでにSM映画の話。そうそう、「セクレタリー」です。ジェイムズ・スペイダーとマギー・ギレンホールがはまり役で、悶絶もののおかしさでした。この題材はグロくなる危険のほうが大きいのに、笑いどころがうまく演出されてて。なかでも最高だったのは、「叱ってほしい」ギレンホールが送りつけてきたミミズを、スペイダーが「赤ペンチェーック！」するシーン。このあと久々にスペシャルな「ご調教」があることもほのめかしていて、おかしいと同時にきわめつきにエロティックでした。ミミズと赤ペンと便箋しか映ってないこの画面は、ギャロの本番場面よりもエッチかも？　エロスは下半身よりもむしろアタマに宿るって納得。

スペイダーとギレンホールがこの特殊なロールプレイングゲームを大真面目に続けるうちに互いの本性を花開かせていき、ついにはエロスに根ざす太い絆を築くっていう過程は、感動的ですらあります。

とはいえ、最後に出てくるスペイダーの毛むくじゃらの上半身には、はっと現実返りしたのを通り越して、なんか珍しいもの見せられちゃったという妙なひっかかりが。ひょっとしたら今まで見たのはアタマを駆使したロールプレイングではなく、かぎりなく動物的な戯れだったのかも、と戸惑ってしまった毛皮、もとい、裸体でした。この肉体がまたスペイダー得意の倒錯世界の構築に貢献してるわけなんですね。と辛じてプラスに評価できるのも、パンツだけは脱がずにいてくれたおかげでしょう。

「セクレタリー」 7月中旬より
シネマスクエアとうきゅうほかにて

往復連載

ドーバー越えて

齋藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

カット・井上陽子